

ネーゲリの音楽思想における厳格様式

——『バッハおよび他の巨匠による厳格様式の音楽芸術作品』再考——

松原 薫

H. G. ネーゲリが刊行した楽譜シリーズ『J. S. バッハおよび他の巨匠の厳格様式の音楽芸術作品』はこれまで主にバッハ研究の文脈において論じられてきた。そのため、ネーゲリが厳格様式に関心を寄せていたこと、そして彼がバッハを厳格様式の枠組みの中で高く評価していたということは十分に検討されてこなかった。しかし、ネーゲリが他の出版社に送った書簡や、『一般音楽新聞』に掲載された出版告知文からは、彼がバッハの作品だけではなく、16世紀から18世紀の作曲家によって書かれた厳格様式の作品を幅広く収集していたことがわかる。そこで本稿は、このようにネーゲリの厳格様式への関心に着目し、これを(1)美的観点と(2)歴史的観点から以下のように分析する。(1)ネーゲリの音楽美学は自由様式の特徴である遊動概念を重視するものである。しかしネーゲリの『音楽講義』を注意深く読むと、厳格様式であっても遊動との両立が可能であり、さらには、自由様式にはない特徴である模倣技法が厳格様式の長所となりうる、とネーゲリが考えていたことがわかる。(2)ネーゲリは厳格様式と自由様式が歴史的に継起したものであると主張し、自由様式の時代である同時代の音楽家たちにとっても、厳格様式で書かれた作品が有益であると述べた。さらにネーゲリは時代の試練に言及し、これがバッハのような優れた巨匠の作品をも選別するものであることを指摘した。ネーゲリのこうした歴史的視点は、ネーゲリの出版の試みが、すでに長い年月を経て残されてきた厳格様式の真の名作を、後の世代にまで継承するものであること——そしてこれは同時代のみならず来たるべき時代の音楽家にとって重要性を持つこと——が示唆している。厳格様式についての深い洞察に支えられたネーゲリの楽譜シリーズ出版計画は、過去の様式、および作品を正典化しようとする1800年頃の傾向の好例として理解することができる。